

学位論文要旨

学位論文題目 日常会話における割り込みの構造的な研究

申請者氏名 岡 曉玲

本論文は、日常生活における言語活動で頻繁に起こっている「割り込み」現象を、若年層の会話（談話）を対象として、構造的なアプローチで捉えようとする研究である。即ち、本論文では、まず割り込む要素を「割り込みツール」と呼び、感動詞類がそれに相当するものとする。また、割り込みが起こる直前の先行発話に焦点を当て、割り込みの起こる位置、割り込みが起こる先行発話の構造や割り込みツールなどについて構造的なアプローチで分析を行った。その結果、割り込みが生起する統語的な特徴により、「割り込み」現象を3つにグルーピングした。さらに、「割り込み」現象は、先行発話（文・節・句）の“終了マーカ―”と関連付けられ、構造的に“終了マーカ―”に敏感（sensitive）である」という仮説を提示した。

本論文の構成は以下のとおりである。

1. はじめに
2. 先行研究について
3. 本論文の考え方
4. 調査要領
5. 分析
6. まとめ
7. 問題点・今後の課題
8. おわりに

第1章では、本研究の研究動機について述べる。まず、実際の日常会話では、「割り込み」現象が頻繁に起こっていることを示す。また、「割り込み」現象に関しては、これまで多くの研究者が日本語教育の立場や言語行動の視点から割り込みの機能や分類を分析し、その性質を解明しているが、構造的な視点から分析したものは見られないのではないかと現状を指摘した。そこで、本論文では、感動詞類を割り込みによく使われる要素と見なし、日常会話における割り込みに焦点を当て、割り込みの起こる位置、割り込み要素や割り込みが起こる前後の構造などについて構造的なアプローチで分析を試みる。

第2章では、会話分析、日常会話における割り込み、談話研究における感動詞類、文の構造という4つの面から、それぞれに関する先行研究を振り返る。

第3章では、本論文の基本的な立場や考え方について述べる。まず、感動詞類を割り込

み要素と見なす。また、感動詞類が起こる位置により、「割り込み」現象がどのような性質をもつのか、どのような統語的な特徴を持っているのかについて網羅的・体系的に究明するという本論文の立場を明示する。さらに、「割り込み」、「割り込みツール」について、それぞれ定義していく。

第4章では、調査方法、データの収集方法などについて詳しく述べる。主として調査対象者、調査時間、場所、調査方法やデータの表記方法などについて説明する。

第5章では、収集したデータに基づいて詳細な分析を行う。まず、感動詞類の出現位置を、「文の直後」、「節の直後」、「句の途中または直後」という3種類の統語環境に分ける。さらに、その3種類を下位分類し、構造的なアプローチによって「割り込み」現象を記述する。まず、「文の直後」に現れる割り込みツール（感動詞類）を考察し、「割り込み」現象の統語的な特徴を分析する。次に、「節の直後」を「連体従属節」と「連用従属節」の2種類に分ける。さらに、「連用従属節」を「従属節A類」、「従属節B類」、「従属節C類」、「従属節D類」に分け、各節の直後で起こる「割り込み」現象の統語的な特徴を分析する。最後に、「句の途中または直後」を「名詞句の途中または直後」、「形容詞・形容動詞句の途中または直後」、「副詞句の途中または直後」、「動詞句の途中または直後」に分ける。さらに下位分類して「割り込み」現象の統語的な特徴を解明していく。

第6章では、分析により得た結果について記述する。まず、「割り込み」現象の統語的な特徴により、大きく【グループα】、【グループβ】、【グループγ】の3つにグルーピングすることができた。そして、【グループα】の特徴から、先行発話（文・節・句）の直後に、先行発話が終了することを示す“終了マーカ―”が存在しているという仮説を立てた。その結果、「割り込み」現象は、先行発話（文・節・句）の“終了マーカ―”と関連付けられ、構造的に“終了マーカ―”に敏感（sensitive）である」と言うことができる。即ち、聞き手が“終了マーカ―”を認識することによって、話し手の発話がそこで終わると判断し、割り込みツール（感動詞類）を用いて割り込んでいる。このようなプロセスを取って、「割り込み」現象が行われているのではないだろうか。最後に、本論文で捉えられた割り込みツール（感動詞類）を、生起の分布によってグルーピングすることを試みた。その結果、同じグループに属する割り込みツール（感動詞類）が、意味的に同じような機能を持っていることが分かった。

第7章では、残された問題点と今後の課題について述べる。まず、「近傍」という現象を取り上げ、具体的なデータを挙げながら分析を行った。これは、割り込みの位置の揺れの問題である。また、割り込みツールは感動詞類だけではなく、接続詞やフィラーという表現形式も現れていることを指摘する。最後に、“終了マーカ―”の違いが性差に反応されているが、より厳密に検証する必要があることを示す。また、言語学だけではなく、社会心理学などの側面から「割り込み」現象の特徴を解明する必要があることを強調する。

第8章では、本論文で扱ったテーマの展望について述べる。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 105 号	氏 名	閻 曉玲
論文題目	日常会話における割り込みに関する構造的研究		

(論文審査概要)

本論文の目的は、日本語母語話者の日常会話(自然談話)のデータを対象として、そこで頻繁に起こっている「割り込み」現象を、構造的に解明することにある。

本論文は全 8 章から構成されており、その内容は、以下の通りである。

第 1 章では、研究動機及び研究目的について述べられている。日常会話における「割り込み」データのサンプルを挙げ、感動詞類が「割り込み」の際に頻繁に使用されている可能性があることを示す。そして、どのような感動詞類が「割り込み」に使用されるのか、という問題を提起している。また、「割り込み」の起こる位置、「割り込み」が起こる統語的な環境を構造的に観察していく、という分析方針についても述べている。

第 2 章では、会話分析、日常会話における「割り込み」、談話研究における感動詞類、文構造という 4 つの面から、先行研究を辿っている。「割り込み」現象の先行研究は、いくつか発表されているが、多くは日本語教育の立場や言語行動の視点から、その機能を分析したものである、ということが示されている。

第 3 章では、本論文の基本的な立場や考え方について述べている。ここでは、「割り込み」や「割り込みツール」といった用語の定義を行っている。特に、本論文では、感動詞類を「割り込み」に使用する要素としているため、「割り込みツール」とは感動詞類を指すことになる。

第 4 章では、調査要領について述べる。具体的には、調査対象者、調査時間、調査場所、調査方法について示している。さらに、本論文で言語データを挙げる際の表記法についても記している。

第 5、6 章では、収集した言語データを分析している。ここでは、まず、感動詞類の出現位置を「文の直後」「節の直後」「句の途中または直後」という統語環境に大きく分類した。さらに、それぞれの統語環境を下位分類していき、出現の相対的な頻度を割り出していった。その結果、統語環境が大きく 3 つのグループに分類できることが判明した。この中で最も頻度が高い「グループ α」には、「文の直後」や「D 類従属節の直後」といった統語環境が含まれるが、最終的にはこれらの位置には「終了マーカ」が存在しているという仮説を立てている。もちろん、本論文の言語データだけでは検証が十分ではないが、イントネーションといった音声面からの証拠、そして同様の概念が会話研究や情報処理研究にも見られることを考慮すると、この仮説は非常に妥当性が高いものと考えられる。

第 7 章では、残された問題点と今後の課題について述べている。「割り込み」の位置に揺れがあること、また「割り込みツール」は感動詞類だけではなく、接続詞や笑いなどの場合もあることが、挙げられている。また、性差などの社会言語学的、あるいは社会心理学的なアプローチの可能性について、今後の課題として提示されている。

第 8 章では、「おわりに」として、展望が述べられている。

以上の内容に基づき、本論文を以下の通り評価した。

1. 創造性

従来の説を十分に理解した上で、新しい論点、仮説、証明方法が付加されている。特に、「終了マーカ」という概念及びそれが出現しやすい統語環境を仮定したことは、非常に独創性・新規性が高い。当該研究テーマあるいは関連研究分野への貢献は明確である。創造性については極めて優れている。

2. 論理性

大量の言語データを対象とし、適正な論証手続きに基づいて仮説を検証している。それによって、一貫性のある展開から結論が導かれている点は極めて優れている。

3. 厳格性

「割り込み」現象に対する構造的アプローチは見られないが、会話研究、感動詞類の研究等に関する先行研究については十分に渉猟咀嚼されている。欲を言えば、先行研究に対する批判的な記述がもう少し必要である。また、言語データの収集・分析方法の厳格性については極めて優れている。

4. 発展性

本論文で提示した仮説は、言語学の中でも、感動詞類、接続詞、指示詞などの研究、また音声学・音韻論、会話(談話)研究にも貢献することができると考えられる。さらに、言語情報処理などの分野でも、議論する意味のあるものではないかと思われる。この点で、大きな発展性を持つものと判断できる。

以上を踏まえた上で、審査委員会における審査委員の合議の結果、本学位論文は全体的に極めて優れていると評価した。従って、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

④・否

審査委員 主査 (氏名) 有元光彦

(氏名) 村と林道

(氏名) 吉村誠

(氏名) _____ ④

(氏名) _____ ④